

またやったNHK TVの問題放映

林 勉

12月1日のNHKスペシャル「汚染水流出の真相」も問題放映であった。この番組表には、「衝撃映像・原発最深部新たな汚染ルート判明放射能との苦闘は続く」との説明文がついており、何事かと思ひ強い関心を持ってTVにかじりついた。

確かに格納容器の圧力抑制室周辺の汚染水プールにカメラを乗せた小さな船を入れ、格納容器の漏えい箇所を発見しようとする映像は初めて見るものであり、今後の対応策の困難さを伝えるものとしては、迫力あるものであった。しかしこれはこの放映の目的ではない。目的は「新たな汚染ルート判明」であった。この点については番組の最後の部分で、複数の放射能観測井戸でトリチウムが観測され、これが海の方角に向かって流れるような傾向を示していることから、汚染水が原子炉建屋の下部から地下水に混入して海に流れだす、新しい汚染ルートが問題であるとの指摘をしている。この指摘までは可能性として十分考えられるものであり、問題はないと思うが、その先が問題である。東電の担当者たちは番組の中で繰り返しトリチウムのみが観測されると述べている。トリチウムは水素の同位体で水の中に入りこんでおり現在の技術では除染できないが、自然界にも大量に存在するものであり海に流出しても外洋の大量の海水で希釈されるので、人体への影響としてはあまり問題にならないとされている。番組では現在はトリチウムのみが観測されているが、「セシウムやプルトニウム等の環境汚染のより強い放射能が時間経過とともにこの新しい汚染ルートを通して海に流れ出す」と結論づけている。この点が問題である。

セシウムは土の微細構造に強固に吸着されてしまい、移動しなくなることはよく知られている。その他の核種も様々な吸着材により吸着できることが知られており、現実に福島第一の汚染水処理では、サリーやALPS等の装置で完全に近い除染効果を発揮している。このことから考えると原子炉建屋から漏れだした汚染水もトリチウム以外は地下の土砂に吸着されて、観測井戸で検出されていないと考えるべきであると思う。それをNHK放映では時間経過とともに出てくると結論づけていることが問題である。これはNHKの原子力報道に共通する、「怖い怖い」路線の延長線である。正しい放映としては「セシウムやストロンチウムは地下の土砂に吸着されている可能性が高いと考えられるが、今後とも注意深い観測が必要だ」ぐらいにすべきである。しかしこれでは怖い度が減じて放送の迫力が不足するとの判断があるのだろう。非常に気づきにくい点で一般国民に誤解と恐怖心を与えるNHKの放送姿勢は許されない。